
囚人～壁を乗り越える二人の紙飛行機～

ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚人〱壁を乗り越える二人の紙飛行機〱

【Nコード】

N8061Z

【作者名】

ツバサ

【あらすじ】

あの有名な鏡音三大悲劇の一つ囚人pさんの鏡音レンの「囚人」リンの「紙飛行機」を原作にかきました。すばらしい原曲の方もぜひお聞きしてください。

序章：リンスide（前書き）

僕の初の長編作編です。誤字・脱字も多いと思いますがよろしくお願ひします。

では、かたぐるしい挨拶はこころへんにして本編どうぞー！

序章：リンside

「そんな、なんかならないんですか？」

「はい・・・残念ながら・・・」

「そっそんな・・・」

パパはそう呟いてあたしの方をちらりと見た。あたしはパパに声をかけようとした。あたしはだいじょうだよ、と。でも声が出なかった。

「せめて声だけでも、声だけでもないんですか？」

「いえ、今は声だけです。そのうち耳が聞こえなくなったり、体が動かなくなったりすると思います」

そうなんだ、あたしの体動かなくなるんだ。なぜか恐怖は感じ無かった。パパは「ごめん、ごめん」と言っていた。

序章：リンside（後書き）

ふう〜アップ終了した。

レン：「おい！！俺の出番なかったぞ！！」

落ち着けレン。今回はリンside次はレンの番だよ。

レン：「つしゃー！！、本当だな！？」

ああ〜、たぶんな。

レン：「たぶん！？」

じゃ〜また次回。

レン：「おい！！たぶんってなんだー！！」

序章：レンside（前書き）

次はレンの番だよ。

レン：「おおーそっかー！！みんな俺の勇士見てくれよ」
うん、そんなにかっこよくないけどねー

レン：「えっかっこよくないの！？」

では、本編どうぞ

序章：レナ side

「母さん、母さん!!」

僕は目の前に血を出して横たわる母親に向けて叫ぶ。でも、返事はない。後ろを振り返る。そこには、軍服をまとった、母さんを撃つた男たちがこちらに向かってくる。逃げなきゃ、そんなことは分かっている。でも、体が動かない。

「かあーさん!!!!」

僕はまた叫ぶ。母さんが僕の頭をなでて、大丈夫だよ、と言ってほしくて。でも触れられたのは、頭ではなく腕、触ったのは、母さんではなく軍服のまとった男達だった。腕を後ろにふりあげられる。痛い。俺たちが何をしていたっていうんだ。父さんもあいつらにかまった。ほかの仲間たちも僕たちは何もしてないのに・・・僕は最後に大きな声で叫んだ。

「母さーん!!!!!!」

でもそんな声も空のどこかに消えて行った。

序章：レンside（後書き）

はい、初のレンside書き終えました。

レン：「俺泣いて、叫んではつかしだったな・・・」

仕方ないじゃん、そういう話なんだし。

リン：「次、あたしの番だね？」

どうだろう、またレンの番かもしれないし、リンかもしれないし、ほかのsideかもしれないからな

リン・レン「ほかのside？」

まあ、2次創作だし。通常の歌とまったく違う終わり方になるかもしれないから。あつそれと、この話が今年最後の投稿になると思います。まだ、2作目だけど・・・それでは、良いお年を。

MEIKO・KAITO・ミク・リン・レン・ルカ「良いおとしを
！！」

おまえら、いつからいたんだ・・・？

追記

編集しました。

レン「どうした？」

いや、ちゃんと歌聞いたら一人称が俺じゃなくて僕でさ・・・

レン「おい！！そこ間違えんなよ」

すみませんでした。 ほら、レンも謝って

レン「なんで俺も！！」

序章：カイトside（前書き）

あけましておめでとうございます。

一同「あけましておめでとうございます!!」

はい、みんなそろってあいさつしたところで今回のsideですが、KAITOsideです。よかったね、KAITO

KAITO「よし、俺の出番だ!!」

リン「お兄ちゃん何役なの？歌にはお兄ちゃんが入るところなんてなかったけど」

まあ、KAITOが何役かは本編で、ではどうぞ!!

一同「どうぞ!!」

序章：カイトside

コツコツコツコツ、私の靴音が廊下に鳴り響く。私は大佐に呼ばれ、大佐のいる部屋に向かっている。私は扉の前に立ち一つ呼吸をして、扉を叩いた。

「入れ」

中から、野太い声が聞こえた。

「はっ、失礼いたします」

私は一声かけ中に入る。

「カイト君、君の功績はよく聞いているよ。先日も子供を一人捕まえたそうじゃないか」

「ありがとうございます」

私は適当に感謝の気持ちを使う。

「しかし、母親を殺したのは駄目だな。できるだけ生け捕りにするように。以上だ。持ち場にもどりたまえ」

「はっ、失礼しました」

私は大佐に一礼して部屋をでていった。持ち場に戻れ、確かに私は、先日捕えたレンとかいう少年がいる部屋の監督をしなければならぬ。しかし私は数日前、病気が発覚した娘の、リンのもとに行きたかった。私は天井を見上げて、愛していた妻とまだこの時間は病院のベッドの上で寝ているであろう娘の顔を思い描いた。

序章：カイトside（後書き）

はい、これがKAITOsideです。

レン「つまり、俺を捕まえた軍服の男兼リンのパパ役なんだな」

うんそうだよ、あつそれと、あくまで主役はリンとレンだからあまりKAITOsideないかも。

KAITO「そうなの!？」

まあ、そうゆうこと。ちなみにこれで序章は、終わります。では、また。

パパの仕事場で：リンside（前書き）

何とか一週間以内に投稿できた。

リン「おそかったね。どうしたの？」

実は風邪ひいてて・・・しかも投稿しようとして間違えて消しての繰り返しで

レン「日頃の行ないがわるいからじゃね〜のか」

リン「かもね〜ww」

リン、レン、双子でその攻撃はひどいぞ！！

リン、レン「なにが〜？」

こいつら

KAITO「ははは、それより風邪は大丈夫なのか？」

ああーちよつと咳が出るだけでほとんど治ってる。というかKAITOは優しいな。

KAITO「だろ？だから出番を増やして」

お前の本音はそこかい！！

パパの仕事場で：リンside

「リンちゃん、そろそろ起きなさい」

あたしは、自分の名前を呼ばれ目を少し開ける。目の前には看護婦の人が立っていた。あたしは声が出ないから起きたことをしめす為に次は目を大きく開け首を看護婦の人の方に向ける。看護婦の方は一つうなずいて病室を出て行った。あたしはベッドの上に座った。先週ははずつと検査ばかりで疲れたが今週に入ったら何もやる事がなくなった。暇で暇で仕方がない。この病院は昨日と一昨日でほとんど見て回ったからとても暇なんだ。パパは今日も仕事に行ってるらしい。パパの仕事場はここから徒歩で10分ぐらいでつくらしい。パパの仕事場？そうだ今日はここを抜け出してパパの仕事場に行こう。パパに見つかつたら怒られるかもしれないけどきつと大丈夫だ。あたしは病院の寝巻の上に白いワンピースを着て白の帽子にピンクのリボンがついて帽子を手にとった。あたしは看護婦さんに見つからないように注意して病室を出た。そして素早く階段を下りた。一階待ち受け室まで出たら帽子を深くかぶって、顔を見られないようにしたらこのあたしを縛る病院から抜け出せる。あたしは早足で病院の扉を開ける。キーという音共に扉が開いて外に出る。久しぶりの外だった。あたしは嬉しくて少し小走りの状態でパパの仕事場へと向かう。途中疲れて少し歩いたがほとんど小走りの状態だった。あたしは大きいフェンスの少し手前で立ち止まった。大きい、広い、ここがパパの仕事場？でもなんだろう、ここはこんなに大きいのにあたしを縛る病院と同じ感じがする。いや、それ以上のものに感じる。あたしの思い違いかもしれない。あれ？誰かあそこにいる？あたしと同じくらいの少年のようだ。うつむいていて顔が見えない。髪も同じ金色だった。でも、服装が違う。あたしのきれいに洗濯された服にたいしてあの少年はひどく汚れた服装だった。あたしは無意識のうちに少年のもとへと歩みよった。少年は足

音にきずいたのかこちらを見上げた。

「・・・誰？」

あたしはその呼びかけに答えたかった。あたしはリンよ、と。でも声が出ない。少年はあたしが黙っているのを見てさびしげに笑った。

「だよな・・・僕のことなんか・・・どうでもいいんだよな・・・」

あたしは少年の言葉に必死に頭を振る。違う、違うの。きずいて。

「違う・・・の？」

通じた。あたしは身振り手振りで声の出ないことを訴える。

「・・・声？」

そう声なの。あたしは両手で大きなバツ印を書く。

「ダメ・・・声が出ないってこと？」

あたしは大きく首を振る。すると少年は納得したようにでもどこか不安げに尋ねてきた。

「どうして僕のことを？僕がいやじゃないのか？」

なにがいやになるのかわからない。あたしはこれでもかっというぐらいに頭を振る。

「僕のことを嫌いじゃない？・・・変わった子だね」

少年は自嘲気味に笑った。あたしは何が変わった子なのかわからなからず首を傾けた。

僕と君：レンside（前書き）

よし、更新完了。

リン「今回は早かったね」

まあね、学校が始まつたら更新が遅くなるかもしれないから。

レン「学校始まるうが俺たちには関係ねえよ。さっさと書けよ」

リン「だよね」

リン、レン前回からなんで攻撃してくるんだよ・・・

KAITO「二人とも落ち着いて、学校始まるんだからしかたないよ」

KAITO優しいな～おま・・・なにか見たことがあるぞこの展開。

KAITO「だろ、だから出番を増やして」

やっぱりそれかい。というかリン、レンなぜ僕をいじめる。

リン・レン「KAITO兄にやってこれって、まあみかん（バナナ）もらったからいいんだけどね」

KAITOお前が首謀者だったのか！！

僕と君：レンside

僕はこの一週間でこの現実絶望してしまった。僕らに未来などない。僕らは生きていてはならない存在なのか？僕が死なずにいられるのは僕と同じ暗い目を宿しながらも優しく語りかけてくれる、殺された母と似た人のおかげだ。でも僕は未来に光が戻ることはなかった。僕はフェンスに体を預けつつむきながら母さんが殺されたあの日を思い出しいると目の前に影ができた。ボクは顔をあげると僕と同じくらいの背格好の少女が立っていた。

「・・・誰？」

僕は少女に問いかける。しかし彼女は答えてくれない。そして思い出す僕の恰好を。彼女はきれいな恰好僕は汚い恰好。僕と君には差がある。僕は少し自嘲し言葉をつづける。

「だよな・・・僕のことなんか・・・どうでもいいんだよな・・・」

そうに決まってる、だって僕は自由を奪われ迫害を受ける少年、彼女はきれいな恰好をした少女だ。なにもかもが違う。僕はここから立ち去ろうとした。その時彼女がずっと首を振ってるのにきがついた。

「違う・・・の？」

僕は彼女がそうではないかという少しの期待を込めて言った。すると彼女は一つだけうなずきまたジェスチャーを開始する。何かを言いたいのか？少女はしきりにのど元をさしている。

「・・・声？」

僕は彼女に聞く。声はどうしたんだ？すると次は大きなバツ印を両手だよった。バツ・・・ダメ。

「ダメ・・・声が出ないってこと？」

僕が言っていると彼女は嬉しそうに首を振る。なるほど、声が出ないのか。でもまだ不安が残る。僕をバカにしにきてるのでは？

「どうして僕のことを？僕がいやじゃないのか？」

僕は問いかける。すると彼女は不思議そうな顔で首を振る。

「僕のことを嫌いじゃない？・・・変わった子だね」

僕はそう言っただけでまた自嘲して笑う。この一週間で自分がいやになつてたからこんなことが口から出たのかもしれない。彼女はなにも知らない、本当にきれいな紙をもっている。周りの大人のように、僕のように紙になにも落書きされてないんだろう。僕は勇気をもって話しかける。このつながりをはなしたくない。

「また・・・来てくれる？ここに」

僕は彼女に問いかける。つながりを作りたい。彼女は どうしてそんなときくの？と言わんばかりに大きく首を縦に振った。僕は笑った。自嘲も苦味もない心からでた笑みだった。

「ありがとう・・・そろそろいかなきゃ」

僕はそういつて立ち上がる。そろそろ召集がかかるはずだ。彼女は小さく手を振っている。本当は何か言いたいのかもしれない。話せないというのも辛いだろう。

「うん、バイバイ。だいたいこの時間帯はここにいますから。」

僕はまた来てくれるかもしれないという期待をのせた言葉をいいこの場を去った。

僕の日常：レンside（前書き）

リン「なんで連続でレンsideなのよ」

仕方ないだろ。交代でやるなんて書いた覚えはないよ。

KAITO「そうだぞ、俺なんて出番まだまだ無いそうだし」

KAITOは前回、前々回の罪からしばらく出番なし！！

KAITO「そんな」

自業自得だ。あつそれと新キャラ登場しまゝす。

リン「そうなんだ。誰？」

まあそれは本編で。どうぞ。

リン・KAITO「どうぞ」

レン「俺のsideなのに全然しゃべってないってありえる？」

僕の小説だとありえる。

レン「なんだよ、それ・・・」

僕の日常：レンside

僕はあの子との話を回想しながら宿舎^{ロウヤ}に戻った。軍服を身にまとう男がいた。男は僕たちを監視する目的でおかれているのであるう、しかしこの2、3日どこか上の空だ。僕はその男の顔を見ないよう、に奥の方へといった。男の顔を見ると怒りが溢れそうになりそうだからだ。僕は無意識のうちに拳を作っていた。

「あら、レン君。帰ってきたの」

僕は顔をあげるとそこには優しくそんな顔の母とよく似た女の人に話しかけられた。

「メイコさん。はい、そろそろ召集かなって思ってた」

「そうなの。そういえば、そろそろこんな時間ね」

そう言っただけメイコさんは笑いかけてきた。僕が絶望しながらも生き続けていられるのはこの人のおかげだ。

「あら？なんかいつもより明るい感じね？何かあったの？」

顔をうかがうようにメイコさんが覗き込む。

「ええーちよっと」

「ふふ、そう。良かったわね」

僕は曖昧に答えるとメイコさんは微笑みかけてきた。きっとメイコさんも哀しいことがいっぱいあったと思う。なのに子供の僕のためにいつも笑ってくれたさるのだ。僕にとってはとても嬉しい。さらに明日もしかしたら今日あったあの子とまた会えるかもしれないからかなり久しぶりにドキドキしていた。

「集合！！早く集まれ！！」

僕たちが話していると召集の声がかかった。

「レン君行いましょうか」

メイコさんは僕の頭にポンっと手を置いて笑いかけながら声の上がつた場所にいく。僕もメイコさんの後ろをついて行った。

僕の日常：レンside（後書き）

はい、ということでMEIKOの登場です。

MEIKO「私の出番来たー」

よかったね、MEIKO

ミク・ルカ「私たちの出番は」

今のところないかも。

ミク「ボーカロイドといえば私じゃない？普通」

ルカ「私英語も話せるのに・・・」

いや、僕英語力ないし、この小説だと英語もネギも出てこないよ。

ミク・ルカ「どうでもいいから私たちを出せー！！」

MEIKO助けてー

KAITO「めーちゃん良かったね」

MEIKO「うん、あゝでも私のsideは無いのか」

んなこといいから、助けるー！！うわっちょ、みっミク、ルカもー！！

紙飛行機：リンside（前書き）

リン「ねえ、文字数少ない？」

まつ「まあ、ね・・・」

リン「まあ、ね、じゃないわよ！！それに改行も少ないじゃない」

だって、リンしゃべらない設定だしさ。K A I T O とレン以外でしゃべる人もいないでしょ？

リン「だったら、レンがお兄ちゃん出さないよ！！」

レンは捕えられてるしK A I T O は仕事があるって設定だしさ・・・

リン「レン、いる」

レン「なっ、何」

レンすら怖がってるし（ボソッ）

リン「ロードローラー用意して！！」

レン「はっはい」

ちよっ、ちよっとそれだけは勘弁してください。

リン「問答無用！！」

ミク「出番あるだけましじゃない・・・ねえ、ルカさん」

ルカ「そうね・・・何もかもあの作者のせいね・・・」

ミク・ルカ「打倒、ツバサ！！」

紙飛行機：リンside

あたしはあの男の子と別れ病室に戻った。途中看護士さんに出会いあわてたがあたしのことを見向きもしないで小走りで行った。体調が急変した患者がいたらしい。あたしにとったら好都合だ。ベッドに座り棚から手紙用の紙を数枚と鉛筆を取り出した。話せないなら書けばいい。

『こんにちは。もう、わかってると思うけどあたししゃべれないの。だから手紙で挨拶するね。あなたが言ってた「僕のことを嫌いじゃないの？」って質問だけど改めて答えるね。全然いやじゃないよ。むしろあなたに会えて嬉しいよ。あなたはどうか？

PS：あなたにも紙を数枚と鉛筆をあげるからあなたからの手紙ほしいな。』

息をついて手紙を見る。これをあなたに明日渡そう。明日のことを思うとドキドキする。こんな感情も久しぶりだ。

あっ・・・しまった。あたしは声にならない独り言をを口にする。

あなたとの間には壁が^{さく}あった。どうしよう・・・あっそうだ。また声にならない独り言を言う。手紙を三角形に折って・・・

手紙をどんどん折っていく。出来たのは紙飛行機だ。これを飛ばせばあなたのもとに届くはずだ。あたしはウキウキしながら紙飛行機^{てがみ}を棚にしまった。また明日もここを抜け出してパパの仕事場で・・・

紙飛行機：リンside（後書き）

はあ、はあ、はあなんとか逃げ切った。
ルカ「裏路地に隠れたとしても無駄よ」
ミク「私たちに取ったら都合だもん」
ちよっ、ルカ、ミクー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061z/>

囚人～壁を乗り越える二人の紙飛行機～

2012年1月14日15時45分発行